

# 第31回 海洋教育フォーラム 群馬大会講師紹介(敬称略)

## 【講演1】群馬で生まれた童謡・文部省唱歌「うみ」

西田 直嗣(にしだ なおつぎ) 群馬大学教育学部 音楽教育講座・教授

専門は作曲・音楽理論・指揮。岡山県倉敷市出身。岡山(倉敷)→東京(亀有)→横浜を経て、現在終の住処として群馬県前橋市赤城山の南嶺に居住。群馬大学に着任するまでは器楽中心の作曲を行っていたが、近年は大手拓次・萩原朔太郎・竹久夢二・星野富弘など群馬にゆかりのある詩人の詩による歌曲および合唱曲を中心に作曲活動をしている。日本音楽コンクール、奏楽堂日本歌曲コンクール等、受賞多数。2012年に群馬おきりこみ合唱団を立ち上げ、合唱を通して地域文化の発展や芸術音楽の振興を念頭に活動している。日本作曲家協議会理事、群馬交響楽団評議委員。

### 〈講演概要〉

童謡・文部省唱歌「うみ」を作曲した群馬県前橋市出身の作曲家「井上武士」、作詩した群馬県沼田氏出身の詩人「林柳波」に焦点をあて、海のない群馬県から童謡「うみ」が生まれた背景について考察します。また、私が指揮・指導をしている「群馬おきりこみ合唱団」による井上武士童謡メドレーの他、自作による群馬名物の合唱曲の演奏も行います。

## 【講演2】化石から探る太古の群馬の大海原

高桑 祐司(たかくわ ゆうじ) 群馬県立自然史博物館・主幹(学芸員)

1968年東京都生まれ。群馬県教委自然史博物館建設準備室を経て1996年から群馬県立自然史博物館の学芸員(古生物担当)として勤務。専門は古脊椎動物学(主にシカ類・サメ類)。他にも博物館所蔵標本や中新世の海藻類(中之条町産)のような群馬県産化石も研究。化石研究会・日本古生物学会・日本地質学会・Society of Vertebrate Paleontology等に所属。昨年は、群馬県立自然史博物館20周年記念展「超肉食恐竜T.rex」を担当。現在、上毛新聞コラム・オピニオン21(第25期)「視点」を定期的に執筆。

### 〈講演概要〉

地層の中から見つかる化石は、太古の世界を読み解く鍵です。今の群馬県は、海無し県の一つです。しかし、私たちが暮らす大地を形作る地層やその中にある化石たちは、この群馬にも温暖かつ豊かな海がかつて存在したことを教えてくれます。今から1000万年以上前の群馬にあった海にどんな生き物たちが暮らしていたのか、その一端をご紹介します。

## 【講演3】森から海へつながるブルーカーボンと再生エネルギー

刑部 真弘(おさかべ まさひろ) 東京海洋大学海洋工学部・教授

専門はエネルギー工学。2002年にスマート研究会を立ち上げ、新しいエネルギー構想を模索。震災後の東北では過疎高齢化に対応した仕組みを提案。文化庁芸術祭大賞等を受賞したNHK番組「メルトダウン」シリーズの事故分析にも協力。日本ボイラ協会会長・ブルーカーボン研究連携機構理事長(兼任)。東京海洋大学 元副学長(研究・社会連携担当)

### 〈講演概要〉

まず、人類が出した二酸化炭素を森に助けられて海が吸収してくれている仕組みを説明し、豊かな森と豊かな海のある再生可能エネルギーの利用社会を提案します。

## 【講演4】シーカヤックで観察する海の生き物たち

藤田 健一郎(ふじた けんいちろう) シックスドールズ・カヤックサービス・代表

1970年東京生まれ。1993年南房総館山市に移住し、南房総の海でシーカヤックを覚える。1998年よりシーカヤックツアー業を始め、業務と同時に南房総の海と海辺の生物とそれらの暮らしについて記録を行うようになる。シーカヤックガイドと海岸自然物ガイドをしながら、南房総地域のアカウミガメの産卵上陸状況や海浜海岸環境の記録などを行っている。雑誌「Kayak ~海を旅する本」(発行：フリーホイール)において、「カヤック乗りの海浜生物記」を連載し、カヤッカーから見た海辺生物の生態を描いている。

### 〈講演概要〉

千葉県南端の館山を中心とした南房総は関東の南端にあります。房総半島の南沖には暖流である黒潮が流れ、太平洋沿岸で黒潮に影響を受ける日本列島の最北の海域という点でも特異な環境となっています。黒潮の影響を直接受ける房総半島南端の海岸線では、ほとんど冬らしい冬が感じられないままに春を迎えます。そのような豊かな海域での海岸散策はとても楽しいもので、さらにシーカヤックを使うことで海の上も散策することができます。南房総の海上や海岸で出会う様々な生き物たちや、その生息環境で起きている様々な出来事をご紹介します。

## 【講演5】東日本大震災大津波の生還者が語る水辺防災教育

安倍 淳(あべ じゅん) 宮城県・(株)朝日海洋開発 代表取締役

1959年生まれ57歳。6年前の東日本大震災で海岸沿いにあった宮城県東松島市の会社事務所で被災し、大津波により河口に注ぐ吉田川を約7km上流に流され救助された。現在は内陸部の大崎市に潜水土木工事や調査を行う会社と共に自宅を再建した。日本赤十字社の水上安全法指導員、一般社団法人・水難学会理事および統括指導員、一般社団法人・小型水難救助艇協会日本支部代表理事として、プロ・アマ・学生を問わず水難事故防止や小型船舶の航行安全啓蒙活動の普及に努める。国立大学法人・東京海洋大学および独立行政法人・海技教育機構講師として、大学生および船舶職員に船舶海難時の洋上生存技術(シーサバイバル)の講義および実技指導を行う。現在、津波で被災した体験をもとに、全国の小中学校・高等学校・大学等の教育機関にて、震災や水災害時において命を守るための防災教育講演会を行っている。また、全国1800名の水難学会指導員とともに、日本全国の小学生や水災害の多い東南アジアの国々に、溺水からのサバイバル泳法である背浮き教育「ういてまて」をボランティアで普及している。そして、その知見を世界溺水予防会議(2015、マレーシア・ペナン)や全米水上安全運航サミット(2016、アメリカ・サンディエゴ)等で発表している。

### 〈講演概要〉

平成23年3月11日に発生した東日本大震災の大津波により、私の住む町はすべて押し流されました。最大到達高さ10mを超える津波の濁流の中、瓦礫につかまり夫婦で7kmほど吉田川を遡り偶然にも生き残る事ができました。発災時の自身の行動を振り返りながら、次に起こるであろう水災害から聴衆の皆さん自身が生き残るための行動や判断について、いっしょに考えさせていただきたいと思います。